

國際貿易の史的構造



町田
室

国際貿易の史的構造

町 田 実 著

前 野 書 店 刊

著 者 略 歴

まち だ みのも
町 田 実

1918年 埼玉県に生れる。

1939年 早稲田大学専門部商科卒，

1946年 早稲田大学人文科学研究所勤務を経て，
現在，早稲田大学商学部教授。

専攻 外国貿易論，国際経済学。

1963年 フランスに留学。EC，ソ連，東欧諸国を視
察。

国際経済学会理事。

埼玉県地方最低賃金審議会公益委員。

著書 『教養の経済学』『社会経済学の基礎理論』
『国際貿易論』『国際貿易の諸問題(上・下)』
『最新国際貿易総論』『世界市場論序説』な
ど。

編著 『転換期の国際経済論』

訳書 クセジュ文庫 『商業の歴史』

現住所 浦和市針ヶ谷 2-10-3

(電話 0488-31-8782)

国際貿易の史的構造

昭和53年6月15日 第1刷印刷

昭和53年6月20日 第1刷発行

© 著 者	町 田 実
発 行 者	前 野 政 雄
印 刷 者	松 本 一 磨

東京都新宿区西早稲田1丁目4-16

発行所 前 野 書 店

電話東京 (203) 3327 番

振替東京 (9) 56814 番

郵便番号 160

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

松濤印刷・誠光社製本

は し が き

近代国家は貿易活動を媒介項としてその態様を整え、資本主義世界をつくりあげた。もちろん貿易活動は資本主義に固有な存在ではなく、古くから存在したが一部の特殊な関係でしかなかった。それが資本主義の成立とともに諸国家を結ぶ重要な環となり、資本主義の経済と切りはなし難く結びつき、人びとの生活の中にまではいり込んだ。しかし、その基礎的形態は人類の文化とともに築きあげてきたものだけに、多くの古い遺制にとりまかれている。したがって、人類にとって貿易のもつ意義はたえず変化しているが、基本的には変らないものであることも事実である。本書は歴史の転変の中からこうした貿易関係の国際間における変化のもつ意義とその背景にあるものを考察の対象としたものである。自ずから資本主義成立後の諸関係に重点がおかれ現代に焦点が合わされているとはいえそれ以前の問題とのかかわり合いこそ重要であると考え。

そこで本書は序章で問題把握のための基礎的な問題を検討した上で、全体を4篇にわち、第1篇では資本主義以前の問題について主としてヨーロッパ社会を中心に概説し、第2篇では産業革命以後の世界市場関係、第3篇では独占資本の形成以後における世界貿易の変貌過程を研究し、最後に第2次大戦後のボックス・アメリカナの成立と崩壊過程における貿易問題に焦点をあてた。各篇は事実の分析だけではなく、その時代の社会経済的背景から貿易と政策理論のもつ意義と限界について若干の考察を試みた。本書各篇の重点のおき方、説明の厚薄には異論もあろうが、紙幅の関係もあり、いまはこのままとした。本書は内容の多くを旧稿（『国際貿易の諸問題』）に依拠したが、新稿も加え全体の構成に大きな改訂を行った。

オイルショック後のスタグフレーションの低迷と世界経済の混迷する中で、各国は新国際経済秩序を模索しているが、それが果してどのような意味をもつか、また日本は輸出大国となり黒字国責任を問われるという事態にある

がこれにどう対処したらいいのか。一方経済活動の国際化は進展し、各国の経済関係はますます緊密化の度を深めており、多国籍企業の活動は従来の概念を超えた展開をしているが、今後の動向を卜する鍵は何か。われわれの前には問題が山積している。本書はこうした問題を念頭において歴史的な背景と本質の解明に焦点をあて出来るだけ平易に叙述しようと心がけた。したがって、広く国際貿易の問題に関心を有する人びとにとって、深く腰をすえて考えるための何らかのよすがとなれば幸である。

1978年3月18日

町 田 実

目 次

序 章 貿易研究のための基礎的諸問題	1
--------------------	---

ま え が き

第1節 貿易研究の対象と方法	2
何を研究対象とするのか 研究方法	
第2節 貿易の社会経済的背景	5
交易の原初的形態 物々交換の転形過程 商人の登場と商業活動 国際貿易の条件の変化と不変なるもの	
第3節 貿易の物理的諸条件の克服過程	18
運輸＝交通の問題 通信手段の発達, 世界通信網の完成 運輸・通信機関の発達と世界市場	
第4節 国際的貨幣信用機構の成立	24
貨幣, 世界貨幣 国際通貨, 外国為替	

第1篇 貿易の社会経済史的背景	31
-----------------	----

第1章 序 説	31
---------	----

第1節 貿易の史的研究の意義	31
一般的課題 従来の研究 時代区分	
第2節 外国貿易と諸国民の経済的発展	34
貿易と経済 商業活動と貨幣経済 自律的経済の発達と貿易	
第3節 世界市場の形成と貿易との関係	35
世界市場の概念 世界市場の構造 世界市場の二重的性格	

第2章 資本主義以前の貿易	39
---------------	----

第1節 原始共同社会における交換	39
取引の起源 原始共同社会の解体過程と交易の発展	
第2節 奴隷制社会における国際貿易	41
奴隷制社会の物質的条件 古代都市国家の出現と貿易 フェニキヤ の貿易 ギリシヤの貿易 ローマ世界の確立とその貿易 ローマの崩壊と その後の貿易 古代貿易の一般的特徴	
第3節 封建制社会における貿易	49
中世初期における貿易活動の後退 中世貿易の出発点 十字軍以後の貿易活動 ハンザ諸都市の盛衰 ヨーロッパ貿易の行詰り 中世貿易の一般的特徴	
第3章 資本主義準備期における世界市場と貿易	57
第1節 資本主義の準備期における商業資本の役割	57
資本主義の準備期 資本の前史と国家 商業資本の役割	
第2節 世界市場の新展開と貿易	61
地理上の大発見 商業革命の展開 ポルトガルの東インド貿易 スペインの西インド貿易	
第3節 スペイン、ポルトガルの衰退	67
スペインの衰退 何故衰退したか ポルトガルの衰退	
第4節 オランダの興隆と商業中心地の移動	71
アンヴェルスを中心とする貿易 オランダの興隆 オランダの貿易と植民地経営	
第4章 重商主義国家の登場	75
第1節 重商主義の概念	75
概念の混乱 ヘクシャーによる概念規定	
第2節 重金主義から重商主義へ	81
重金主義の歴史的意義 重金主義の終焉	

第3節 重商主義の政策とその本質……………84

貿易差額主義 輸出産業の保護政策 重商主義の本質

第4節 17,8世紀の国際貿易——重商主義国家フランス

とイギリスの顛末……………90

1. フランスの重商主義……………90

フランス経済の特色 フランスの海上勢力 コルベール主義

関税政策 植民地経略の失敗

2. イギリスの重商主義……………95

航海条例 植民地貿易と産業保護

3. 国際貿易の発展……………101

イギリス貿易の発展 フランスの外国貿易

第5章 重商主義理論の形成と成熟過程……………107

第1節 重金主義の理論家たち……………108

ジェラード・マリノーズ アントニオ・セルラ ミッセルデン

第2節 重商主義理論の確立者——トーマス・マン……………112

第3節 重商主義理論の成熟……………116

ダッドレー・ノース ジョン・ロック サイモン・クレメント

デーヴィッド・ヒューム

第4節 「自然法」思想の研究からみた古典派理論の先駆……………122

自然法の概念 ウィリアム・ペティ カンティヨン

第5節 フィジオクラートの登場……………127

フィジオクラシー 純生産物 (produit net) 自然的秩序と自

由放任主義 (Laissez-faire)

第6節 重商主義の解体……………129

第2篇 資本主義形成後の国際貿易の躍進と変貌……………133

第1章 産業革命とイギリスの世界市場の組織化	133
第1節 「世界の工場」イギリス.....	134
産業革命の由来 産業革命の展開 交通運輸手段の革新と貿易	
工業的優位の確立 世界市場支配の技術的基礎	
第2節 自由貿易体制の基礎.....	145
イギリスの世界貿易独占 イギリスによる世界市場の組織化	
第3節 国際金融組織の完成.....	153
ボンドによる多角決済制度 金本位制の確立 国際金本位制と銀行業	
第2章 産業革命の国際的波及と諸列強の挑戦	157
産業革命の波及	
第1節 大陸諸国およびアメリカの産業革命.....	159
フランス ドイツ アメリカ合衆国	
第2節 イギリスへの反撥と吸引.....	164
列強の貿易拡大 ドイツ関税同盟の貿易 フランスの貿易	
アメリカの貿易 世界市場に吸引された日本	
第3節 自由貿易体制下の植民地貿易.....	169
産業資本と植民地主義 属領との貿易 植民地の輸入関税制	
第3章 自由貿易体制の混乱	173
第1節 イギリスの世界市場と恐慌.....	173
恐慌の世界性 イギリス工業独占の挫折	
第2節 世界貿易の一時的停滯と保護貿易主義の復活.....	175
大不況による世界貿易の停滯 独占的保護貿易主義の登場	
第4章 自由貿易主義と保護貿易主義.....	181
第1節 総 説.....	181

自由貿易主義と保護貿易主義の政治・経済的根拠	
第2節 イギリスにおける自由貿易主義	183
自由貿易主義の胎動 自由貿易主義の推進	
第3節 諸国における保護貿易主義	185
A. ドイツ	
関税同盟以前のドイツ 関税同盟の結成とその欧策	
B. アメリカ合衆国	
地方的利害の対立 19世紀前半の関税 保護貿易主義の勝利	
C. その他の諸国	
19世紀におけるフランスの貿易 19世紀におけるロシアの貿易政策	
第5章 古典派貿易理論の生誕	201
体系化と実践性 古典派貿易理論の展開	
第1節 アダム・スミスの貿易理論	203
スミスの根本理念 富の概念と分業 国際分業論 (International division of labour) 外国貿易の利益 スミスの重商主義批判 事物自然の進路と外国貿易	
第2節 リカードゥの貿易理論	211
リカードゥ経済学と貿易問題 比較生産費説 金の国際的配分と収支均衡化メカニズム リカードゥ貿易理論の意義と限界	
第3節 J. S. ミルの貿易理論	219
時代的背景とミルの立場 国際需要均等の法則 ミルの補説とその限界	
第6章 後発資本主義のための保護貿易主義	229
まえがき	229
保護貿易主義の性格	
第1節 ハミルトンの保護貿易主義	230
その経済思想 保護政策の内容	
第2節 F. リストの保護貿易主義	233
リストの思想形成 リストの「国民的体系」とその意義 国民主義	

と生産諸力の理論	リストの保護主義と関税制度	リストの体系	
と諸国における保護政策			
第3節 保護貿易主義の後継者たち			242
ケアリー	R. シュラー	保護貿易主義のその後	
第3篇 独占資本主義の形成と世界貿易の展開			249
第1章 独占資本主義の形成と世界貿易の変貌			249
第1節 独占資本主義の3段階			249
第2節 独占の形成とその特徴			250
独占資本の成立	競争から独占へ	銀行の独占化＝金融資本の成立	
第3節 世界市場戦の激化と資本輸出			255
原料資源の占有強化	資本輸出と新たな植民政策	資本輸出の実態	
第4節 第1次大戦前夜の世界貿易			258
世界工業生産の発展と貿易の動向	原料、食料生産と貿易		
第2章 第1次大戦後の世界貿易			265
第1節 再編する世界市場関係			265
新しい世界市場関係	イギリスの後退とアメリカの登場	列強の	
比重	世界貿易の不均等発展	世界貿易の主要なルート	
第2節 世界貿易における多角決済機構の崩壊			271
多角貿易体制の前提	世界恐慌前の多角貿易体制	世界恐慌と貿易	
ブロック化による世界貿易決済機構の後退			
第3章 独占資本下の貿易政策			281
第1節 独占資本と国家			281
独占資本と国家の役割	通商条約と独占資本	国際的協力と対立の深化	

第2節 独占関税とダンピング	284
保護関税から独占関税へ 独占価格とダンピング	
第3節 ダンピングの意義と実態	287
ダンピングの概念 ダンピングの分類 似而非なるダンピング	
ダンピングの与える影響とその対策	
第4節 貿易の国家統制	293
輸入割当制と輸入許可制 為替管理 求償貿易	
第4章 新古典派貿易理論から近代理論へ	299
新古典派貿易理論の性格	
第1節 アルフレッド・マーシャルの貿易理論	300
代表的包の概念 マーシャル曲線とその性格	
第2節 タウシッグの貿易理論	304
タウシッグの意図 国際交易の条件	
第3節 近代理論の体系化	309
近代理論の社会的背景 ハーバラーの貿易理論 B. ウリーンの貿易理論	
伝統的理論の立場からのハーバラー, ウリーン批判	
ハロッドの雇用理論的貿易理論 国際収支の均衡メカニズム	
第5章 マルクス経済学における貿易理論	325
第1節 マルクス, エンゲルスの貿易問題	325
時代的背景 自由貿易か保護貿易か	
第2節 マルクスにおける貿易論の位置づけ	333
経済学批判体系と貿易 国民的価値と国際的価値	
第3節 レーニンにおける外国貿易の意義	341
何故外国貿易が必要か 世界市場の独占化と資本の輸出	
第4節 世界市場における価値法則の修正	347
問題意識 前提条件 国際間における価値法則の修正 若干の問題	
貨幣価値の相対的相違と貿易 貨幣の相対的価値と外国為替相場	

第4篇 第2次大戦後における世界貿易の展開…………… 361

第1章 パックス・アメリカナの成立と世界市場の再編成… 361

大戦終結後の世界市場

第1節 アメリカ経済と貿易…………… 362

アメリカ資本主義の絶対的優位 アメリカの国際収支 ベトナム
戦争と国際収支

第2節 イギリス経済の危機とヨーロッパ諸国…………… 368

ドル不足とマーシャル援助

第3節 第3世界の登場…………… 370

その経済的地位 貿易と援助

第2章 戦後国際貿易の組織化…………… 375

第1節 ブレトン・ウッズ体制…………… 375

IMFと世界銀行

第2節 GATTと貿易の自由化…………… 377

GATT体制 貿易の自由化とケネディ・ラウンド

第3節 ヨーロッパ貿易の再建…………… 380

マーシャル・プランとOECE EECの結成とその展開

第3章 パックス・アメリカナの崩壊と 新国際経済秩序への胎動…………… 385

第1節 パックス・アメリカナの崩壊…………… 385

パックス・アメリカナの基礎 ベトナム戦争のもたらしたもの
通貨危機と世界的インフレの高進

第2節	オイルショックとスタグフレーションの本格化	389
	インフレ発生のメカニズム オイルショックの影響	
第3節	自由化政策の後退	391
	輸出規制の登場 新通商法の成立と新国際ラウンド 輸入制限の動き	
第4節	直接投資と多国籍企業の進出	396
	アメリカ資本の対外進出 アメリカの孤立主義と世界主義	
	多国籍企業の進出の条件	
第5節	新国際経済秩序の構築をめぐる	403
	問題点 何が「新国際経済秩序」を必要ならしめたか	
	いかなる新国際経済秩序か	

序章 貿易研究のための基礎的諸問題

ま え が き

貿易問題を考察の対象とするとき、われわれはまず、貿易とは何かを問い、これを構成している諸条件をとらえ、これを分析し、その実態に迫ることになろう。

貿易は、主体的にとらえるとき外国貿易といわれる。それは国境を越えて行われる対外取引であり、もともと労多くして危険に充ちた活動であった。現在においてもその性格は変わっていないし、むしろ拡大しているかもしれない。貿易の目的は、国内で入手できないものを、外国からできるだけ労少なく安全に手に入れることであろう。最大の関心は外国品の輸入であり、その使用価値にあったのである。輸出はそのための手段であり、本来の目的ではなかった。このことは、最初の貿易国が必ずしも物資の豊かなところではなく、むしろ、物資のとぼしい貧弱な土地から発していたことによってわかるであろう。

社会経済的条件の変化にともない、貿易の形態、方法も変化してゆくことになる。貿易研究のための基礎的問題の一つは、どのような社会経済的条件を背景として、いかなる貿易が行われたかを明らかにすることであろう。

さらに具体的に貿易の展開する条件としては、運輸＝交通、通信などの諸手段の発達をあげなければならない。それと関連して物品貯蔵機関の問題もあるであろう。こうした技術的諸手段の発達が、社会経済的諸条件と相関関係にあることは、いうまでもないが、これなくして貿易活動はありえないのである。

貿易活動は経済の成長の中でも、本来的には使用価値の異なる物品を労少く輸入することに主たる関心があることには変わらないが、貨幣・信用の発

達にともない、交換価値が直接の目的となり、そしてその背景に近代国家の整備が進むにともない、複雑な様相を呈してくる。一見本来の目的とは全く異なる問題が貿易をめぐるて生起するようになる。資本主義経済の登場とともに、国際的な通貨・信用とそのメカニズムは急速な発展を示し、貿易とは別個に重要な位置をしめるにいたるのであるが、基本的にはそれぞれの国の立場からする貿易の問題に関連しているのである。

このようにして、貿易研究をその根本にふれていくと、その複雑な体系の背後に現代の国家がからみあっていることに気づくのである。われわれは基礎的な貿易研究の背景にある諸問題を考察することにより、より体系的な研究への緒口にしたいと考える。

第1節 貿易研究の対象と方法

何を研究対象とするか

まず、貿易の対象というとき、貿易という現象をどう捉えるかが問題であろう。把握の仕方は同時に把握する主体の問題でもあるからである。

一般的に言えば、貿易あるいは外国貿易とは、政府あるいは個別企業が国境をこえて行う商品取引にほかならない。しかし、現在国際間には、商品取引以外にも海上輸送や保険その他のサービスや資本の取引のように、目に見えない経済取引も存在しているので、広義にはこれらも含めて外国貿易あるいは国際貿易と呼んでいる。要するに、貿易取引とは、国を異にする相手との取引であることが、一国内で行われる一般商取引と区別されるのである。⁽¹⁾

そこで研究者は、この現象についてどのような視角から問題とするかが問われることとなる。オーソドックスな方法によれば二つの側面からの接近の仕方が指摘され、方向付けがなされている。⁽²⁾ 一つは、社会経済的側面からの研究であり、他は個別企業の側面からの研究である。具体的には前者は貿易の理論および政策論にわかれ、後者は貿易経営学的研究（貿易経営論）と

商学的研究（貿易実務論）と法学的及び商学的の両分野からの国際売買論という三つの分野からなるとされている。

さらに、本来、貿易ときり離し難い関係にあったし、現在も密接な関係にある陸海空の交通運輸および通信の問題から、倉庫・港湾関係の問題や海上保険、外国為替・関税等の実際に関した問題などをどのように貿易問題として関連づけ、一貫した論理の中でどう研究するかの問題があるであろう。もちろん、このような分野を含む研究がないわけではなく、一例を挙げれば、ベーレンス（Chr. Behrens）のように、⁽³⁾ その貿易経営論は、個別経営の立場から貿易の課題と意義を論じた上、貿易の経営形態、実際の貿易活動、商品輸送と通信、貿易における危険と保険、関税等を説明し、最後に輸出促進について詳論しているものもある。しかし、こうしたドイツ経営学の流れに属する研究は、第2次世界大戦後、企業戦略論として導入されるにいたったアメリカのマーケティング論の流行により、どちらかといえば影を薄くしていったかの感が強い。アメリカの研究は、企業戦略論の立場から戦後技術革新による大量生産、大量販売の風潮を背景にし、他方国際的交流の緊密化と国際的法規の比較研究の必要を背負って隆盛となった。そこには戦略のための知識の総合は必要であっても、それが体系的であることを必ずしも必要としないかのように見える。しかしそれは行動科学としての実績をつぎつぎと積み重ねることにより、新しい体系としての意義を主張するにいたっている。戦後初期の「輸出のためのマーケティング論」(Export marketing)は、アメリカの世界戦略の進展とともに、「国際マーケティング論」(International marketing)とタイトルを替え、さらにその延長線上に「多国籍企業論」が登場している。「多国籍企業論」も個別企業的側面からの研究であることは疑いないところだが、その巨大さと多面的性格から単なる個別企業の戦略論としての枠を越え、各国の法制、社会、経済の全分野に関連を持ち、その影響するところ各国の政策のあり方をも問われるまでの問題に転化した。

こうみてくると、貿易研究の対象に関する問題は単に視角の問題ではなく、